

①師松村禎三から私に

藝大入学試験の面接時に「今後どのような作曲がしたいのか」といった質問を私になさったとのことだが、その質問をなさったのがご本人であったのか定かでない。あの松村音楽と、お顔がその時点では一致していなかったからである。

一生の師と仰ぐ松村禎三との初会話として、以下のように記憶している。1年次作品、演奏審査（二年時）の昭和53年5月。

拙作はチェロとピアノの二重奏曲。当時の指導教官北村昭氏のもとで提出。全体の演奏審査が終了し、旧奏楽堂出口付近で、審査員のお一人が厳しい面持ちでこちらへこられ、私と目が合うと「君の作品、、、悪くなかったよ」とゆっくりと声をかけてくださった。師匠から頂く言葉としては、褒め言葉に近いことは後々になってわかるのだが、同時に作品について幾つか尋ねられた。要は作曲期間と、チェロを選んだ理由にあった。

カザルスによるバッハ無伴奏組曲の再発見や「鳥の歌」について語ったと記憶している。師はチェロ協奏曲の作曲を当時真剣に考えておられ、拙作のチェロの部分にまで意識が及んでおられたようだ。「期間」については、その後の拙作完成後必ずといって良い程確認される事項となった。曲の着想は6月ごろから徐々に書き始め、暮れの試演会を経て改訂し、提出。ざっと7～8ヶ月だったと簡略に答えると、「決して長くはないな」と。当時の私はといえば、半年以上かけて作曲することは稀だったので若干戸惑った。

物腰は柔らかいが厳しい眼差しで包むように諭してくださった方が、松村禎三だという事を、後に同級生の森本、南、両君から教わるまで判らなかった。

オペラ『沈黙』作曲の傍らにいた一人として、また当時作曲されていたピアノ協奏曲などの管弦楽曲の作曲スタンスとその集中力を考えれば、「決して長くはないな」は次第に納得のいく言葉となっていく。

私に「作曲とは実際に書く行為に加え傑作に仕上がるかどうか」また「祝福されて世に出る事も重要」「『沈黙』と刺し違えても良いと思っている」等と語られた。

師にとっては、題材、資料収集、初演奏者、意義、顕彰、等作品を産み落とすべき環境や時代を見極めることですら作曲の一部という事か。真摯で純粋であるが故に詰まる所、包括的で総合的で、一心になられる。

亡き父直純は師について「純音楽の作家だが映画等劇伴の音楽も他には見られない価値観をもち、妥協が無い。映画音楽作家仲間ではかなりの遅筆だがその音楽に魅惑される人は多く、信念を感じる。日活撮影所華やかしころ、近くに松村邸があり、何度か訪問したことがある。作曲家眞鍋理一郎氏息子、平太郎さんや、松村みどりさん祐介さん等と、師邸でハイハイ競走なるもので随分と盛り上がった。ゆえに、純ノ介は松村さんにその昔、会っているはずだ」と率直に語ってくれたが、幼少の私に記憶があるはずもなかった。

## ②第二実技のレッスン

サントリーブルーローズ。追悼演奏会で、師の弦楽四重奏曲を聴きながら師との想いは廻った。

私が藝大生の頃は3～4年次に第二実技というカリキュラムが設定されていた。卒業担当教官の他に講座を超えて、他の先生に教授される制度である。三善、間宮、八村各先生等に希望を出し指導を受けられた先輩、友人もいた。

2年の演奏審査会で声をかけてくださった著名な作曲家の音楽と、レッスンには以前からとても興味があり、迷わず師を強く希望した。この授業から、師の技術、音楽、人柄は勿論、幅広い藝術に対する造詣の奥深さに触れることができた。

入学直後の私は、他大学の演奏家をも含めた作曲家と演奏家の団体「アンサンブルリーベ」をたちあげ、春秋の年二回、定期的に発表活動を行っていた。そこで初演した、木管5重奏を師のレッスンに持っていくと、「八宝菜のような曲だな」「作曲家と演奏者とは全く立場が異なる。時に大きく対峙し一騎打ちの戦いのようにもなるのに、徒党を組み傷口を舐め合うような事はどうか、、、」と、厳しく諭され、否定され失望した。当時ダラムシュタット等の前衛音楽の状況に少なからず影響を受ける反面、ストラヴィンスキーや印象派や新古典主義にも、シンパシーを感じる等、自分の中で様々な音楽様式が錯綜していた。

それらの模倣、折衷的で、師のように「自己の内面を厳しく見つめる作家としての姿勢」「個としてのアイデンティティーの追求」など作曲に対する高邁な意識はとてもおよばなかった。海外の表面的な華やかさに目を奪われその模倣に奔走した自分を師に見抜かれ非常に恥ずかしかった。

「作曲にはデーモンが必要」などメタファーを語られ、未熟で僅かな藝術感しか持ち合わせない我々が直感的、且つ理論的に理解、感受できるよう指導をされ、音楽、作曲の本質に迫る大切な「要」を師と共有することができた。

「実体がない」と行った言葉を師は良く使われた。学生時代、6部分からなる弦楽四重奏を持っていったところ。即座に「こんな短い細切れは曲と言えるのか。」「こういう意識で曲を書こうとする、意図がまずわからん。実体がない」と。弦楽四重奏は「年輪を重ねてから挑む分野である」とも。当時、ハイドンセットを意識して凝縮された6つの部分からの作品を書こうとしているというような話をすると、今後の現代作品のあり方、記譜法、将来の作曲家の行く末を危惧されていた。当時は新ウィーン楽派などの弦楽四重奏曲をも強く否定された（後にそれは徐々に解除、撤回されたが）。当時、管弦楽の作曲に没頭しておられ「まず、とにかくオーケストラ作品を書きなさい。」と執拗に勧められた。師の心底に溢れる「オーケストラ作品への莫大な情熱」を猛烈にひしひしと感じた。当時、師は弦楽四重奏の編成への興味は薄く、モーツァルトの6つのハイドンセットもディヴェルティメントも、ベートーヴェンのラズモフスキーも眼中に無かったに違いない、反面、自分が作曲されている領域では、何者の追従も許さない程、緻密になられるのであった。

このように、一点、一極に集中する作曲姿勢を見せられると、弟子は簡単に易々と作曲が出来なくなり、全く筆が進まず学年末の提出すら覚束ない者が出るほどだった。

### ③映画音楽

卒業後、映画音楽のお手伝いを何作かさせて頂いた。熊井啓作品の録音の編成をどうするかに話が及んだ。日活での打ち合わせ後、師が書かれた弦楽四重奏を、二階のお部屋で、何度もテープで聴いた。チェロのピッチカート、ビオラの線的な動き、最終楽章の有り様をはじめ、私にしきりに、感想を求められた。結局、弦楽四重奏の編成を基本として、その映画の録音をしようと決められた。（実際はその後、管等も必要となった。）

「テーマ以外一曲も音楽がはいらない映画音楽を作りたい」（これは無謀か、究極の映画音楽かのいずれかだと誰もが思う。最晩年に黒木和雄監督作品で実現しているかも知れない）

「情景に付けるのではなく心情、心情より意義に付随音楽を」（知的で、理解できるが、大衆心理を考えると心情部分にこそ付随させたいものだ。しかし重厚で厳しい響きが中心の松村音楽であれば言わんとする事を監督、スタッフは理解するのである。）

「役者の台詞がしっかりしていれば音楽は必要ない」

確かに今様の映画、テレビドラマ等の劇版音楽の役割には時折寂しさを感じる。音の洪水で効果音と音楽のとりあい。甚だ残念だが、演技力や台詞の拙さの補い役。ノン聞すら埋め尽くすように。（「のんもん」とは映画用語で聴衆は全くの無音とを感じるが空気や存在の音は必要であり、それらを効果が用意する『効果音』を指し、効果マンの腕の見せ所でもある）

付随音楽に置いて師は、非常にアナログ的な試行錯誤を好まれた。映画のレビュー後、そのビデオを持ち帰り、自宅のカセットデッキで幾度もいろいろな音楽を当ててご覧になっていた。師の純音楽作品はかなり主観の強いものだが、映画音楽では私や偏陸さん（寺山修司の子息ヘンリック）奥様の意見に耳を傾け、より客観的な意見も大切にされた。地道な経験の積み重ね、より良い音を求める粘り強さ、俯瞰の視野、懐の広さが松村作品の根源にあると感じた。私は師のこれらの姿勢に接する事で徐々に成長することが出来た。

### ③師の言葉の輝き。

・正月や様々な機会、レッスンなどの折に頂いた言葉についてもう少し書いておきたい。

「君はこれから松村門下の一員として行動するように、、、いいね。」（厳しく受け止める私だが反面とても嬉しい。師の所属講座が変わった時の伝達事項の一節だった。）

「結果、形式的になるかもしれないが、曲の行き先はうなぎの寝床に聞いてくれ」（作曲の最中、形式に捕われる必要はない。形式そのものすら作曲の一つであれと。）

「銀河を横から見たようなフォルムの曲を書きたい」（まさにピアノ協奏曲の1番。実際に見る事は困難だが言わんとする事は判る）

「君は一本うどん食べたことがあるか、『こう～先っぽを1回箸でつまむと、最後まで食べられる。』私「.....」「作曲とはそういうものだよ」（弦楽四重奏作曲のころに。京都「たわらや」のうどんのことらしい。上記銀河の話と重なる。）

「曲には顔があるものだ、君たち学生作品には顔が見えない。なぜそうなのか、自分の胸に手を当てて良く考えて見ろよ」（習作などであるからといった甘い気持ちで作曲に望んでいないか。どんな作品でも傑作を書く気概を持つことだと）

「作品は常に顔を持っている、良い作品というものは真新しい貌、形相をしている」

「新しい曲を作る時はマッソーサラな気持ちで、全てを捨てる事からはじめなくてはいけない」

「誰がどれだけ♪（音符）をかいて作曲しているか判るはずがないだろ、今まで書いた楽譜やスケッチを全部持って軽井沢に来なさい」（若造の私が♪を書いた数では自信があると、うっかり豪語した時におしかりを受けた）

「作曲にはデーモンが必要だ」（毎日ピアノの前に座っていると動機が突如天から降ってくる、それを確り捕まえること。とも）

「君は欲張りだ、全てを捨てるそこからはじめろよ。実体のないものをあれこれいじってもろくなものにならない」

「4、7音楽という言葉は君は知っているか」

（上記2節、旋律が皆無の音色旋律を作曲しようとした時、虻蜂取らずに落ち入った拙作に対して。）

「曲は出だしで決まる」「はじめの数小節を聴いてだめだともいいましたが、最後まで聴きやっぱりだめでした。」（伊福部さんの言葉でもあるようだ）

「幾日も幾日もピアノの前に座ったけど、結局、伊福部先生のところへ、出だしの部分だけを持っていったんだよ」（自作のピアノ協奏曲の冒頭を弾きつつ）

「楽想は天から降りてくるもので探しにいくものではない」

「バロックという言葉にはいろいろなものが鏤められ絢爛ではあるが、いびつさを伴うので自分はあまり好きになれない。むしろ最上を極めるという意味のクラシックが重要である。」（古代ローマでは六段階の最上のものをクラシックと言っていたそうだ。）

「藝術はクラシックでなければいけない。」（一般に言われるように古典的といった意味ではなく最上を極めよとの意。）

「作曲家にとっての良い耳とは、傑作と駄作を即在に判断できる耳のことだ」

「黛さんはベッドに座り、腕を組み白い壁を確りと見つめていた」（師が亡くなる少し前、私にふと言われた）

「颯爽とした凄い曲だと思い作曲者を見ると、また、代黒さんという人の曲だったんだよ。」（清瀬の療養所にいたころの感想を述べられた）

「テイサンはナルちゃんよ（久寿美さん）」（m<^^>m 嬉しそうに笑って全く否定しない先生は、確かにナルシストでした。）

「劇伴を書く時にな〜んでモ良いやと思う場面の曲があるだろ、それを思えば良いじゃないか」

「作家たるものはディテールに拘りすぎて本筋を見誤ってはいけない。」

(上記2節、レッスンで管弦楽法の技法に拘り過ぎて実体がおろそかになった部分を戒められた時に。)

- 映画音楽について

「熊井啓（監督）はステーキしか食べない、注文しない」（録音の打ち合わせ後の食事の時もお二人はともにステーキを注文されたが、議論伯仲でどちらも先に手をつけようとなさらなかった。ステーキは当然最上の比喻であり、そしてどちらが先にそれに手を付けるのかの根比べ、美意識比べでもある。また最高の作曲家に映画音楽を頼んでいるのだ、と同時に監督が納得する音楽を用意するのは容易ではない）

「また、よっちゃん（映画音楽指揮者大家の吉澤さん）から沢～山お金をかりて、必死に純音楽を作曲する。完成すると、借金を返すためにまた必死で劇版をいくつも作曲する。時にみどりが熱を出したりして騒然となるが、とにかく日々作曲のことしか頭に無いんだよ」（結婚はした我々だが、金が無い日々の生活が大変だとの話をした折に師ご夫妻の体験談）

- 『沈黙』、宗教感などについて

「神は見捨てたのだ」（『沈黙』の最後は神に救われ、神を見たとするのが一般的）

「君は神を見たことがあるのか」（心の清いものは幸いである神を見るだろうとの聖書の一節を紹介した時に）

「自分の宗教を捨てられるかどうか、真剣に考えた事があるのか君は、」

（私は絶句）（そうか『沈黙』の主題は「棄教」、）

「棄教は死刑にも値するとも考えられる」

「プネウマの井上神父と二人で話すことがあるがそこは教会なのか」（「2人以上のものが集い神について語るとそこを教会と呼ぶ」と聖書にありましてと話した折に）

（以上『沈黙』について）

「子供の頃は毎日天上の龍のようなものを見ながら、経をあげていた」

「君たちは生命力がある」

（結婚後、ご挨拶に二人で何うと度々言われるようになった。我々は「苦勞しながらよく頑張っている」とお褒めの言葉を頂いたのかと思い、丁重にお話を伺っていたが、どうも仏教的には「欲張りである」と言った意味もあり、藝術

家は新しい創作にあたり、常に捨て身になり、真っ更からはじめなさいとの戒めでもあった。）

・作家と年齢について

「君はいくつだ、君の年だとモーツァルトやシューベルトは既に傑作を作曲し意気揚々と音楽界に名を轟かせている。」

「君の年齢ではショパンは数々の名作を残してもう死んでいるよ」

（厳しくも大家と比肩するように、励ましてくださる言い方が懐かしいが、実際、御自分の作品とその年齢にはこだわりがあったようだ）

・コンクール、交流音楽祭などについて

「音符の数や小節の数、長さではなく質の高さである」（当然のことだがコンペに出品となると譜面ズラなどを気にしたくなる）

「このコンクールに真剣に取り組んでくれて、ありがとう」（意外な一言であったがコンペを受ける側の心理しか考えた事が無かった私が、作品を選ぶ側でありながらも真に自分が推薦できる作品かどうかを自問する先生の姿に感銘し、深く感謝した。）

「海外から推薦され郵送された作品が真に良い作品であれば幸せな事だが」

（国際交流音楽会の開催で困窮している私に。国際交流は有意義だが、実際には様ざまな要因がからんだ作品が集まり、師が納得できるような作品が集まるかどうかを心配しておられた。結果を見透かされていた）

～その他のさまざまな想いで出来事や会話について記す。～

・我々の披露宴の折、仲人である師の話が45分に及び、来賓が仲人による一曲の話術交響曲を聴くようになったため、式次第が大混乱。

・ひもじい時に頂いた、奥様の手料理「向田邦子鍋」は忘れられない。（邦子は我々夫婦の高校の先輩でもあり、それをご存知であったかもしれない。励まされた。）

・結婚の折「傑作ができるまで、せめて修士作品が完成するまで、嫁さんに食わしてもらえ」と我々や両親の前で平然と言われた事。

・杜 鳴心、團伊玖磨、黛敏郎、山田一雄、松村禎三といった、大作曲家による審査員のコンクールが開催された事

・小山薫について。

師「彼は自分で最後の晩餐会を用意するといっている。どう思うか」

私「...自己愛ですか？」

師「小山薫なら、、、わからんが、、」

私「何をどうするのですか、...」

師「んーん、、、」

・映画音楽について補足

サリンの音楽。映画「冤罪」のアシスタントにおいて

師「私はサリンの音楽は書けない。....君はかけるのか」

私「仕事でありますから、、、、なんとかできると思います」

師「そうか。赤城圭一郎主演映画、「ノックアウト」の効果と音楽の入れ方が素晴らしかった。あれはお前の親父の作曲では無かったか？」

私「そのように聞いていますが、見た事はありません。」

師「あのように騒音や喧噪と音楽が上手にミックスできると良いのだが」

私「効果マンの能力にも左右されると思いますが騒音の部分の想定音域を予め除いて作曲しておいたら如何でしょう？」

師「ん、、、そうか、、、？そのようにできるのか？」

私「巧くいくかは判りませんが、意識して善処してみます」

深い河の録音において

私「昔、三味線の肩を叩いて入りを教えながら、録音したことがあります。」

師「楽器でもできると思うか？」

私「？.....まあ可能かもしれません。どうしてですか？」

師「君に仕事を頼みたい」

私「？.....はい、、、？肩タタキですか、、、うーん。。。」

(上はジョークでは無く本当の話です)

//////////

以上、師と私を含めた家族との出来事や語録の一端をお示し致します。

師匠の作曲・音楽に対する重い姿勢が伺える反面、私ごとき不出来な弟子に対して、厳しくも深い理解や示唆を込めて指導された教育者、音楽導師としての様子が皆様に伝われば嬉しく思います。松村禎三ご夫妻のご指導ご鞭撻を思い返し、その魂にたいして、ここに改めて深く心より感謝の意を表します。

20120702